

vivo

5 MAY 2006

CONTENTS

| | |
|---------------|----------|
| ぞうのババール |1 |
| アンドレアス・シュタイアー | |
| フォルテピアノ・リサイタル |2、3 |
| 最近の公演から |3、4 |
| ネタマ&プチ情報 |5 |
| インフォメーション |6 |



Babar and the distinctive likeness are trademarks of Laurent de Brunhoff and are used with his permission. Copyright © Laurent de Brunhoff. All Rights reserved. TM and © Nelvana. Jointly Licensed by Nelvana/Ross



写真上:ぞうのババール 下・左高橋アキ 下・右:長野羊奈子
写真右:アンドレアス・シュタイアー



c harmonia mundi France-Alvaro Janéz.

今年で「75歳」。ババールはますます元気です。 5 / 5 (金・祝)音楽物語 ぞうのババール

いきなりで恐縮ですが、クレイ・アニメーション映画『ウォレスとグルミット 野菜畑で大ピンチ!』を観ました。奇矯な発明家ウォレスと、その相棒で寡黙ながら超有能な頼れる犬・グルミットのコンビがくりひろげる珍冒険。脚本もみごとでしたが、クレイ・アニメの完成度には驚嘆しました。クレイ・アニメをご存知の方も多いと思いますが、要するに粘土人形を作ってひとコマひとコマ動かしながら撮影し、つなげてゆくアニメーション。ご想像どおり、とてつもない時間と手間がかかります。この『ウォレスとグルミット』は1980年代に英国で生まれた人気シリーズで、今回の『野菜畑で大ピンチ!』ははじめての劇場用長編(85分)ですが、ディズニーが資本をバックアップし、大量のスタッフを動員したにもかかわらず、5年の製作期間を必要としたそうです。しかしその事実を知らずとも、キャラクターたちの複雑な動き、目と眉だけで微妙な感情を表現するグルミットの繊細な造形、精巧極まりないセットと照明など、この作品が最高の想像力と技術と労力を注いだ作品であることはよくわかります。ここには「子供向きだから」という手抜きは一切ないのです。おそらく、半世紀のちには、きっと“クラシック”となっていることでしょう。

さて、前置きが長くなりましたが、水戸芸術館にも、ご家族揃ってお楽しみいただける“クラシック”がございます。それが、今年で6回目、映像をデジタル化して復活してからは3回目となる『音楽物語 ぞうのババール』です。『ウォレスとグルミット』ほど大量の人々が関与しているわけではありませんが、その労力と想像力、思いの深さは決して負けていません。一昨年、昨年とこの企画の内容

については皆様にご紹介してまいりましたが、これが初めてという方のために、あらためて『ババール』についてご説明しあげたいと思います。

フランスのジャン・ド・ブリュノフが1931年に発表し、たちまちのうちにフランス、そして世界の子供たちの心をとりこにした愉快なぞうの冒険譚『ぞうのババール』。このお話は、当時のフランスの大作曲家プーランクによって音楽化され、朗読とピアノによって「上演」できるようになりました。しかし、ブリュノフが描いたあの素敵な絵と、朗読と、ピアノ演奏とを同期させることはできないか、と考えたのが、前・水戸芸術館音楽部門主任学芸員の室住素子さん。室住さんはカメラマンと共に絵本から160枚のスライドを製作し、朗読とピアノに合わせそれをスクリーンに投影してゆくようにしました。こうして生まれた水戸芸術館版『ババール』は大ヒットし、1995年から97年まで3年間芸術館で上演されたほか、全国各地の14箇所で開催されました。

室住さんが芸術館を離れ、この企画もしばらく休んでいましたが、舞台技術系の協力を得て映像をデジタル化して2004年に復活、現在に至る、というわけです。ピアノの高橋アキさん、語り手の長野羊奈子さんのコンビは第1回目から不動。そしてもうひとりの「演奏者」である映像操作は、復活後、スタッフの馬場千恵が務めています。大スクリーンに投影されてゆく、原作者のタッチをそのまま生かしたババールの絵と、生の語りとピアノとがありなすアンサンブル。いかがでしょう? 『ウォレス』同様、大人の方にご覧いただいても、十分に楽しんでいただける作品だと思いますよ。

さて、今年、『ババール』が誕生して75周年にあたります。1931年にジャン・ド・ブリュノフが第1作を発表したのち、『ババール』絵本のシリーズは息子のロラン・ド・ブリュノフへと受け継がれ、現在に至るまで新作が発表され続けています。「75歳」といえば人間ではもう円熟しきった世代ですが、絵本の中のババールはまだまだ精力旺盛な壮年期、お后や息子たちと共にぞうの王国で活躍を繰り返しています。私たちも、記念の贈り物することにしましょう。いつも『ババール』上演前には、高橋アキさんによってサティの『子供の音楽集 新・子供の音楽集』が演奏されていますが、今年高橋アキさんに、ちがう曲を演奏していただくことにしました。それが、芥川也寸志 赤ずきんです。作家・芥川龍之介の三男として1925年に生まれた芥川也寸志は、エローラ交響曲 ヒロシマのオルフェ などの話題作を発表し、戦後の作曲界をリードしたひとり(1986年没)、『地獄門』『砂の器』『八つ墓村』『八甲田山』など、名作映画の音楽も手がけています。こうした硬派な側面の一方で、往年のNHKの名番組『音楽の広場』では黒柳徹子と共に軽妙なトークをくりひろげ、また『音楽を愛する人へ』というクラシック入門者むけのすばらしいエッセイも残しています。常に「これから」の聴き手のことを考え続けていた芥川也寸志が、子供のために書いたピアノと語りのための『赤ずきん』。高橋アキさんの語りとピアノによって、『ババール』の世界とここよく共振することでしょう。今年の『ババール』、例年にも増して、見逃せません。ご家族皆さんと、こどもの日にぜひ芸術館においでください!

シュタイアーのディスク
左から文中



こんな18世紀、こんなモーツァルト、聴いたことない！ 5 / 12(金)アンドレアス・シュタイアー フォルテピアノ・リサイタル

モーツァルトに贈る、音楽の花束(その2)

4月29日(土)に行われるATMアンサンブル第21回演奏会に続く「モーツァルトに贈る音楽の花束」第2弾は、フォルテピアノの鬼オ・アンドレアス・シュタイアーのソロ・リサイタルです。モーツァルトも愛奏した、18世紀の名ピアノ製作者アントン・ヴァルターの銘器を基に、現代の名匠クリストファー・クラークが製作したフォルテピアノが用いられます。

さて、モーツァルトの室内楽を集中してとりあげたATMアンサンブル第21回演奏会に対し、シュタイアーのソロ・リサイタルはモーツァルトを含む18世紀後半の3人の偉大な作曲家からなるプログラムです。私たちは、ともすればモーツァルトという作曲家がこの時代極端に突出して(もちろんそれはある意味事実なのですが)他に誰もいなかったかのような印象を持ちそうになりますが、もちろんそんなことはまったくなく、この天才も、他の巨大な才能たちとの切磋琢磨なくしては、存在し得なかったといえましょう。その意味で、今回シュタイアーが構成したプログラムは、2人の先輩作曲家に囲まれた「18世紀を生きるモーツァルト像」を体感させてくれる、知的刺激に富んだプログラムであるといえます。

とはいえこのプログラムにおいて、2人の先輩、

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(以下C.P.E.バッハ)とハイドンは、決してモーツァルトの引き立て役に甘んじているわけではありません。2人とも、言うまでもなく、18世紀後半に活躍した無数の作曲家たちの中でも桁外れに傑出した音楽家です。つまりこのプログラムは、18世紀後半の鍵盤音楽の巨匠たちの音楽をめぐる旅、でもあるのです。だとすれば、モーツァルトだけにスペースを割くわけにはいきません。C.P.E.バッハとハイドン、2人の音楽家の横顔にまずは迫ることにしましょう。

C.P.E. バッハ、そしてハイドン

C.P.E.バッハ(1714~88)は、いわゆる「大バッハ」、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの次男にあたります。兄弟であるヴィルヘルム・フリーデマン、ヨハン・クリスティアン、ヨハン・クリストフ・フリードリヒと共に、大成した音楽家でした(ヴィルヘルム・フリーデマンは天才と言われつつ身もちくずし早世してしまいましたが)いや、大成した、などという生易しいものではありません。生前のその名声は、父バッハをはるかにしのぎ、バッハといえどC.P.E.がヨハン・クリスティアン(「ロンドンのバッハ」と呼ばれました)をさす、というのが18世紀後半の通り相場だったのです。

さて、そのC.P.E.バッハですが、名前こそ有名ながら一般の音楽ファンにとって、まだその音楽は必ずしもなじみ深いものとは言えないかもしれません。大バッハの音楽を神格化し、息子たちの音楽を過小評価する19世紀以来の価値観も、ずいぶん受容の妨げとなってきました。しかし、1988年の没後200年を境として、C.P.E.バッハの音楽は急速に復活を遂げつつあります。その音楽は、しばしば「多感様式」と呼ばれ、当時文化人たちの間を吹き荒れた「シュトゥルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)」の精神と重ねて論じられることがしばしばです。

なるほど、その音楽を聴けばそれも納得です。音程の跳躍が多く、複雑にうねる主題。思いがけない転調の連続や半音階の頻出。猛烈な疾走と急激な停止。そしてゆっくりした楽章での、ただごとでない情感の高まり。聴き手の関心を一瞬もそらすことを許さない、集中力と激しい感情表出に満たされています。しかしそれは、鬼面人を驚かす安易な効果とはまったく違ふ、自らの心のありように忠実であろうとする姿勢の反映なのです。前半生をプロイセンの宮廷でフリードリヒ大王に宮廷音楽家として仕えた彼は、その斬新な音楽性を大王に嫌われ、冷遇に近い扱いを受けるほどでした。しかし、彼は自らの心の声に従い続け、後半生はハンブルクの街の音楽監督として活躍することになるのです。時代が貴族社会から市民社会へと移っていく時期、みなぎる「独立精神」をもって時代と格闘した音楽家、それがC.P.E.バッハでした(この「独立精神」という言葉は、久保田慶一氏の大著『エマヌエル・バッハ』[東京書籍]の中で用いられているものです。たいへんな労作で、C.P.E.バッハを知るための必読書です)。今回とりあげられる2曲のファンタジーは、いずれも前述のようなC.P.E.バッハの自由な精神の羽ばたきを感じさせてくれる作品ですが、特に最晩年に書かれた嬰へ短調のファンタジーは、冒頭の恐るべき暗さから最後の開放的なアレグロまで、息をのむほどの劇的展開に満ちた傑作です。

C.P.E.バッハに少し字数を割きすぎたかもしれませんが、ハイドンもまた、長いエステルハージ宮廷での宮仕えの末に、最後は音楽家としての自由を獲得した、この時代らしい生き方をした音楽家です。彼がたくさん残したピアノ(クラヴィーア)

シュタイアーを聴く3枚のディスク

チェンバロ奏者としても数々の名盤を発表しているシュタイアーですが、ここではフォルテピアノによる近作3枚を選びましょう。

モーツァルト:ソナタと組曲集

(ハルモニア・ムンディ・フランスKKCC504)

モーツァルトの鍵盤作品集第1弾は、きわめて凝った選曲です。まず、めったに聴くことのできない組曲K.399(385i)からスタート。モーツァルトをバロック方向から眺める選曲ですね。この組曲、サラバンドの途中で終わっているのですが、シュタイアー自身の補筆完成版が用いられます。さらに、通常の組曲では最後に置かれる舞曲ジークを、他の単独曲(小さなジーク ト長調 K.574)で代用するという凝りよう。そのあとは、ソナタ変ホ長調K.282(189g) グルックの主題による変奏曲K.455と続き、幻想曲K.475とソナタK.457の黄金の組み合わせで締める。完璧です。K.475の即興性!

モーツァルト:ソナタ集

(ハルモニア・ムンディ・フランスKKCC524)

ソナタK.330(300h)、K.331(300i)、K.332(300k)の3作を収録。この盤はなんとと言ってもK.330(300i)のトル

コ!トルコ!トルコ行進曲! オリジナル楽器演奏=原典に忠実、なんて誰が言った?と思わせる、自由奔放な、やりたい放題の演奏。ファジル・サイといい勝負です。これ、芸術館の実演ではどうなるのでしょうか?もちろん他のソナタにも面白い「読み」がいっぱいあります。それにしてもこの人のCDジャケット、アップ顔が多いなあ。ヴィジュアル系というわけではないのですが(失礼)、知性を宿した瞳の輝きに、吸い寄せられるようにきょうもCDを買ってしまうのです...

シューベルト:ソナタ 第16番 嬰短調 D.845、

プゼ:コントラ=ソナタ(AEON 輸入盤)

これは問題作。シューベルトのソナタを第3楽章まで弾いたあとに、このソナタを解体・変容させたプゼの現代作品(フォルテピアノの機能全開!)が奏され、またシューベルトの終楽章に戻る、という構成。シューベルトの心の暗部にどこまでも降りてゆくような体験です。シュタイアーの横で慈愛に満ちたまなざしを送っているのが作曲家。



アンドレアス・シュタイアー

ソナタは、かつての練習曲のような扱いから、宮廷で、君主との知略の限りをつくした音楽遊戯としての、凄みのある姿を明らかにしています(伊東信宏氏の『ハイドンのエステルハーゼ・ソナタを読む』[春秋社]はそのあたりの秘密を解き明かすスリリングな著作)。今回取り上げる晩年の2曲(ソナタ変ホ長調、アンダンテと変奏曲 ヘ短調)は、その鍵盤音楽の集大成といえる傑作です。前者のユーモアと活力、後者の深いメランコリー。「パパ・ハイドン」といった呑気なイメージを吹き飛ばす、ハイドンの広大な精神のありようが感じられます。

モーツァルト、そしてシュタイアー

さて、このような音楽も、その真価を発揮する

ためには、19世紀以降のロマン派ピアノ曲とはまったく違う特質を引き出す、すぐれた弾き手に出会う必要があります。現代最高のフォルテピアノ奏者のひとり、アンドレアス・シュタイアーがその適任であることは、言うまでもありません。まず彼には、前提として、それぞれの作曲家の音楽の様式、音楽言語の特徴への深い理解があります。そして、それを表現するための最適のメディアとして、現代のピアノではなく、作曲家が生きた時代に用いられた鍵盤楽器 チェンバロやフォルテピアノ を用います。しかし、その演奏は、「歴史的正確性」とか「当時の音楽の忠実な再現」といった幻想とは無縁です。C.P.E.バッハの「独創精神」やハイドンの「知略」に、現代の人間として深く、激しく共振すること。楽器の選択や歴史的情報は、あく

までそのためのツールにすぎません。

そのことを証明してくれるのが、近年の彼のモーツァルト演奏です。前ページのディスコグラフィでご紹介していますが、その大胆さと衝撃は、モーツァルトの音楽が「冒険」である、ということはいかなく明らかにしてくれるものです。1996年、クリストフ・プレガルディエンとのシュベルト 冬の旅。98年、MCO第36回定期演奏会における、クスマウルとのメンデルスゾーンの二重協奏曲。いずれも忘れがたくシャープな名演を聴かせてくれたシュタイアーが、ついに芸術館で実現するソロ・リサイタル。これは、まぎれもなく「必聴」のできごとです。ともあれ驚愕のトルコ行進曲をぜひお聴きください!

《矢澤》

最近の公演から

MARCH



1



2



3



4

合唱セミナー2006(3月5日)

今回の合唱セミナーは、畑中良輔氏を講師に招き、ブラームスの混声合唱曲 運命の歌 作品54を取り上げた(ピアノ伴奏は生井澤紀江)。合唱愛好家にとってもあまり馴染みのない作品ではあったが、日本音楽界の重鎮である畑中良輔氏の指導・指揮で歌える貴重な機会とあって、好奇心と意欲に溢れる愛好家が多数参加した。畑中氏はヘルダーリンの詩に「利便性や生産性に振り回され、人間は破滅に向かっているのを知りながら、それを止めるために何もすることが出来ない」現代社会への警告を読み取る。だから、天上の清らかさを歌った第1部に続き、「悩める人間どもはただためら減法に時を費やし…」と現世の人間の苦しみを歌う第2部において、畑中氏の表現は激烈を極めた。参加者はその指揮棒に必死に食らいつき、畑中氏のこの作品に込める思いを共有し、熱い共感に満ちた歌声をホール狭しと響かせていた。《関根》

兼氏規雄 クラリネット 室内楽演奏会

(3月11日)

水戸市在住のクラリネット奏者、兼氏規雄さんによる演奏会。気鋭の若手弦楽四重奏団のカルテット・エクセルシオや、ソリストや室内楽奏者、伴奏者など多岐に渡り活躍中のピアニスト、小坂圭太さんとの共演で、モーツァルト生誕250年を記念し、モーツァルトの室内楽作品を3曲披露。落ち着いたのびやかな音色の兼氏さんと、繊細で優美な演奏のカルテット・エクセルシオ、色彩豊かな音色の小坂さんと

のアンサンブルは、ホールをゆったりと温かな雰囲気でも包み込みました。アンコールは、ウェーバー:クラリネット五重奏曲 変ロ長調より 第4楽章《馬場》アンケートから 特にクラリネット五重奏がすばらしかった!心が洗われました。(水戸市:H.K.さん)クラリネット、すばらしい演奏でした。モーツァルトらしくとても私の気持ちにすっきりと入ってきました。(無記名の方)こんな繊細かつ大団なクラリネットの音があつただろうか。甘く切ない音色を自在に吹きこなされ、ただただ感嘆いたしました。ブラボー!共演者も一つになって音楽を作り上げる姿がサイコー!(東京都:T.H.さん)堂々とした音楽で、会話のみえるアンサンブルでとてもよかったです。(水戸市:T.T.さん)

びわ湖ホール声楽アンサンブル

[企画・構成・指揮:若杉弘]3月12日)

若杉弘氏率いる びわ湖ホール声楽アンサンブルが、滋賀県大津市より水戸芸術館へはるばるやって来ました。東日本初登場の びわ湖ホール声楽アンサンブル。マエストロ若杉のトークも急速加わり、2時間を超える贅沢なコンサートでした。プログラムは、若杉氏企画・構成ならではの洒落で素敵仕掛けがたくさんつまった、まるで宝石箱のような内容。ソロあり重唱あり合唱ありで、ルネサンスから20世紀フランス・ドイツの作品、そして日本人作曲家による作品も取り上げ、「声」のための作品をたっぷり聴かせてくれました。この、すべてがメインとも言える重量級のプログラムを見事に歌い、聴衆をどんでん返した世界に引き込んでいったマエストロ若杉とメンバ

最近の公演から MARCH



1



2



3



4



5



6



7



8

ー16名、ピアニストの岡本佐紀子さん、左成洋子さんのアンサンブル。まさに、演奏者と聴衆が“ともに”音楽のたのしみを分かち合えた瞬間であったと思います。リハーサル時、マエストロ若杉の下、演奏についてはもちろん立ち位置や移動の仕方などにも気を配り、すべてを緻密に作り上げてゆく彼らの姿を目の当たりにし、ステージに上った瞬間からアンサンブルは始まっている、と強く感じました。アンコールは武満徹：と のうた 武満徹：翼 林光：十二月の歌《馬場》アンケートから 独立した声としてもパートとしてまとまった場合でも、16の声が重なることで生まれる響きは他に替え難い美しさを持っていました。若杉先生は指揮はもちろん、お話もあって良かったです。（無記名の方） 予想の何倍も素晴らしかったです。わざわざ片道3時間かけて聴きにきたカイがあった。是非、東京でもやって欲しい。（神奈川県：R.M.さん） すばらしい歌声に、笑顔もプレゼントしてくださいまして良かったです。（水戸市：Y.K.さん） 関西方面の音楽団体の名演を聴ける機会をもって頂けて喜んでます。選曲も哲学的でとてもステキでした。感動しました。（無記名の方）

泉リリコ ピアノ・リサイタル(3月18日)

水戸市在住のピアニスト、泉リリコさんのリサイタル。長年研究を続けている作曲家フランク・リストを取り上げ、「トランスクリプションとオリジナル曲」と題し、2つの側面からこの作曲家に迫るアプローチが取られた。すなわち、メンデルスゾーン 歌の翼に やシューマン 献呈 といった他の作曲家による歌曲をリストがピアノ独奏用に編曲した作品にはじまり、自作の歌曲を元にした ペトルカソネット第104番 などが続き、最後は大作 ピアノ・ソナタ 短調 で締めくくるといった内容。この重量級のプログラムを見事に弾き切ったピアニストに、会場からは大きな拍手が贈られた。アンコールは、リスト：愛の夢。《関根》アンケートから 学校でも先生の演奏を聴いたことがあったが、いいホールで聴く演奏は格別です。感動しました。（無記名の方） 泉さんは常磐短期大学の専任講師の職にあり、たくさんの方々がご来場になりました。たいへん素晴らしいです。パンフレットにあるリストのトランスクリプションへの思いを胸に、1曲1曲味わうことができました。曲の順番も良かったです。（水戸市：M.H.さん） テーマ性のあるリサイタルということで意味があると思う。まとまりを持った音楽を聴かせてもらったという気持ちになる。（土浦市：T.H.さん） 水戸に新しい名ピアニストの誕生です。また違う作曲家の曲で、芸術館で演奏される日を楽しみにしています。（東茨城郡：H.I.さん）

ヴォルフガング・ツェラー

オルガン・リサイタル(3月20日)

オルガニストが演奏会に際し、まず準備しなくてはならないのが、それぞれの演奏曲ごとの音色選び（レジストレーション）である。ツェラーはこの作業を、オルガンの全ての音色、全ての音高を丹念にチェックしながら弾くことから始めた。ツェラーの情緒的な演奏の背後にある、緻密な音楽作りの一端を窺い知る一瞬であった。1991年のリサイタルからお

よそ14年ぶりとなる今回の演奏会のプログラムは、ヴェックマン、リュベックなど17世紀の北ドイツ・オルガン楽派の作品を中心に、さらに、J.S.バッハ、モーツァルト作品などから構成された。ツェラーは、曲間の拍手を拒み、聴き手の集中力を持続させ、ひたすら音楽と対峙させようとした。心が浄化されるかのような神性の宿る演奏であったが、圧巻は最後に演奏された近代ドイツの作曲家レーガーの作品である。近代オルガンの多彩な音色のパレットを使い尽くして奏される音響は、まさに天から降り注ぐ光の束のように感じられた。バロック時代から今日に至る、ドイツを中心とするオルガン音楽の魅力が凝縮された一夜であった。アンコールはJ.S.バッハのコーラル前奏曲 いと高きところでは、神にのみ栄光あれ BWV675 《中村》アンケートから とても感動的なコンサートでした。水戸まで聴きにきて大正解でした。（千葉県：H.T.さん） 大学でオルガンを専攻している者ですが、今後の進路選択にかかわる貴重な体験の場となりました。ありがとうございました。（台東区：Y.I.さん）

加藤訓子のファミリー・ワークショップ

「WOOD MUSIC」(3月21日・24日・25日)

加藤訓子とワークショップ参加者による ジョイント・コンサート(3月25日)

今年で4回目となるワークショップ。今回は木をテーマに「WOOD MUSIC」と題し、パーカッションист加藤訓子さんによるログドラム(丸太をくりぬいて作った打楽器)を使用したワークショップとコンサートを開催しました。ワークショップ前日、今回使用する100台近いログドラムを積んだコンテナ車とともに現れたのは、現代彫刻家の石川理氏。桐や檜、蜜柑など様々な種類の木を彫った、このログドラムの製作者です。ステージ上に並んだ、形も大きさも様々なたくさんのログドラムを嬉しそうに眺めながら「どうぞ、叩いてみてください」と言い、木の温もりのようなやわらかな笑顔を見せてくれた石川さんは、ゲスト講師としてワークショップとコンサートにご参加くださいました。ワークショップに参加した7歳から71歳までの38名は、加藤さんとともにリズムを刻み、ジョイント・コンサートで演奏する作品を創り上げていきます。木の種類によって音色も違うログドラム。場所をコンサートホールから広場やエントランスホールにも移し、響きの違いなども楽しみました。加藤さんの「まわりの音を聴いて！目を閉じて感じてみて！」という言葉に、最初は戸惑いを感じてしまった参加者もいっしょにいましたが、回を重ねる毎に、頭で考えるのではなく木の音を身体で感じる、ということが出来るようになっていったようです。そして「私のリサイタルではなく、私と皆のコンサートなのだから」と、声を囁きながらも丁寧に指導する加藤さんの真剣な眼差しに負けないくらい、参加者も真剣に加藤さんを見、互いの音を聴き、最後のコンサートで40名がひとつにまとまった瞬間は他に替え難い喜びに溢れていました。それは言葉ではなく、加藤さん、石川さんをはじめ、参加者全員の笑顔に表れていました。加藤さんは参加者とのパフォーマンスの他に、マリンバ・ソロも披露。その技術と響きの美しさは圧巻でした。木の音楽を心から堪能できた3日間であったと思います。《馬場》

1～2. びわ湖ホール声楽アンサンブル 3～4. 泉リリコ ピアノ・リサイタル

5～6. ヴォルフガング・ツェラー オルガン・リサイタル 7～8. WOOD MUSIC



* nettama= ネットワークする猫。タマ。芸術館のコンサートをサカナにいるんなところへnettamaします。

りあげられた3人の作曲家の「ピアノ曲」をじっくり聴いてみてはいかがだろうか。実はこの時代、「ピアノ曲」がすごく面白い。なぜなら、鍵盤楽器の主役がチェンバロからフォルテピアノにうつってゆく激動の時期だったからだ。むしろ、当時の鍵盤楽器の総称だった「クラヴィア」曲と呼ぶべきかもしれない。ハイドンの「ピアノソナタ」なんて、実際には半分以上が「チェンバロソナタ」だ。だから、この時代の楽器の変遷に対応した全集録音で聴くと、面白さもひとしお。現在13巻まで！)出ているマイクロ・シュ・スーパーニによるCPEバッハの鍵盤音楽全集なんて、チェンバロ、クラヴィコード、タンジェント・ピアノ、フォルテピアノ等々いろんな楽器が登場する(輸入盤、BIS)。また、クリスティーネ・ショルンスハイムが録音したハイドンの全集も、チェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノを使い分ける。フォルテピアノは、晩年の作品に関してはハイドンがイギリス旅行で出会って感激した、ブロードウッドの同タイプのピアノを使うという凝りよう(13枚組+インタビュー収録の特典盤。輸入盤、カプリッチョ)。演奏はどちらもすばらしい!!の一言。ちなみにショルンスハイムはシュタイアの弟子でもあり、連弾曲では師弟共演が聴ける。モーツァルトについてもいま衝撃的な全集(3巻まで出ている)が進行中だ。ドイツの奏者、ジークベルト・ランペによるものでやはりチェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノを使い分けている。しかし、晩年のソナタまでチェンバロで弾くとは。しかも、提示部の反復とか、楽譜にない装飾つけまくり。とにかく驚きの連続です(輸入盤、MD+G)。さあ、ディープ古典派の世界へみんなではまりましょう!



CPE バッハ:鍵盤音楽全集 (これは第11巻のジャケット)

「古典派」三巨匠の「ピアノ曲」を(もっと)聴くシュタイアのリサイタルがあるのでこのところ古典派の音楽をいっぱい聴いているのだけれど、いやあ、古典派ってほんとうに面白いですねえ。

まあ、なにが「古典派」なのか、という定義は実は難しい。音楽史上の「時代区分(バロックとか古典派とかロマン派とか)」というのはあとの人間がつくったものだから。作曲家は「私がルネサンスを代表するジョスカン・デ・プレである」とか「僕は後期ロマン派のマラーです」とか自覚して作曲していたわけではないものね。だから「古典派」というのも、明確に定義できるものではない。いちおう18世紀後半の、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンを中心とした作曲家たちのことを指すことが多いようだけれど、じゃあ始まりはどこからか? 1750年まで生きたJ.S.バッハは少なくとも違う。でもバッハは晩年には同時代人から「時代遅れ」なんて言われていた。ということは、18世紀前半はバロックから古典派への過渡期ということになるのかな? ええい、めんどろだ。バッハの息子たちから古典派にしちゃえ、と思うと彼らはときどき「前古典派」とか呼ばれたりする(この呼び方の背後には「ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンをもって古典派の完成」とみなす古い考え方があるね)。じゃあ終わりは? ベートーヴェンは「もはやロマン派」と呼ばれるし、いっぽうでベートーヴェン以降のシューベルトやメンデルスゾーンは「ロマン派の中の古典派」と言われたりする。わけがわからん。

そこで、僕個猫の音楽体験をひきあいに出させていただくのをお許しください。僕がいちばん最初に好きになったのはロマン派や近・現代の大編成のオーケストラ曲で、そのあと中世・ルネサンスやバロックに走ったから、古典派にはずっとおくてだった。でも、バロックをさんざん聴いたあとで古典派をきいたら、「そうか、古典派はまた違った面白さがあるなあ」と思うようになった。ハイドンやらモーツァルトら音楽史上の超人たちに、失礼な話ですが、

で、僕が思う古典派の面白さ(つまりそれは

「古典派とはどういう音楽か」についての自分の考え)について言うならば、「不均等、即興的、感覚的でドロドロしているバロック」に対し、「均整が取れ、論理的で、知的スリルがある古典派」ということになるかなあ。これはもちろん大雑把な言い方で、バロックももちろんものすごく「知的」で「論理的」な音楽なだけだけれどね。でも、古典派はやはり啓蒙主義時代の音楽だけあって(?)構成の見通しははっきりしているし(「ソナタ形式」とか)まず感情(アフェクト)の表出ありきだったバロックよりも、定型の中でどれだけ微妙な差異を演出できるかに音楽の主眼があるような気がする。つまり、その差異を敏感に感知できるアンテナをこちらもそなえていないと、「なんかみんな同じじゃない?」みたいな印象を受けかねないことになる。実は高度に鍛えられた耳を要求する音楽なのかもしれない。市民革命の時代を前にもはや危殆に瀕していた貴族という音楽エリートの最後の砦、と書いたら極論だろうか。

そう考えると、ベートーヴェンの音楽というのは「すべての人々に開かれ、伝わる劇的な表現」として、もはや古典派というより市民革命の申し子であることがわかるし、こんどシュタイアのリサイタルで取り上げられるカール・フィリップ・エマヌエル・バッハ、ハイドン、モーツァルトの3人が古典派という時代の中ではいかに「異常」な音楽だったかがわかる(あくまで僕の印象だけれど、古典派の「標準」は、バッハはバッハでもヨハン・クリスティアン・バッハとか、アーベルの音楽のような気がする)。CPE バッハの音楽はバロック的な異常さと、独創的な個としての主張がミックスした類例のないものだし、ハイドンは定型を守っているようにみせかけながら、それを徹底的に遊び、当時の聴き手が「もうついていけない」と思うその一歩手前で絶妙に踏みとどまってみせる。そしてその一線を踏み越えてしまった危険な天才がモーツァルトなのだ。

シュタイアのリサイタルは、そういう「古典派の過激な天才」たちの姿をいかに伝えてくれるものとなるだろう。そして、もしシュタイアのリサイタルに興味がしたなら、リサイタルでと

茨城のラジオ局、茨城放送の番組に音楽部門スタッフが入れ替わり立ち替わり登場するレギュラー・コーナー登場! 毎週月～金曜日6:00～8:30AMに放送されている『田辺昭雄のちよいマジらじお』内『田辺昭雄のなんだっけおじさん～ちよい耳クラシック』のコーナーです(毎週金曜日、7:20頃から約5分)。どこかで聴いたことがあるクラシック名曲、知らないけど妙に気になるク

ラシック名曲をとりあげ、曲のミニ紹介とさわりを聴いて、その曲を手軽に知ってしまおうという、欲張りな5分間。芸術館のコンサートで演奏される曲もたくさん登場するはず! すでに4月7日(金)から放送中、金曜の朝のひとときに『ちよい耳クラシック』をどうぞ! 周波数は水戸周辺 - 1197KHz、土浦周辺 - 1458KHzです。

プチ情報 速達

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM 水戸「芸術よもやま話」金曜日 18:15頃 ~ 15分ほど。水戸周辺 83.2MHz、日立周辺 84.2MHz。

茨城県の演奏家による企画を募集します。.....
平成19年度の茨城の演奏家による演奏会企画を下記の要領で募集いたします。

【応募要項請求方法】

直接水戸芸術館エントランスホール・チケットカウンター(9:30-18:00 月曜休館)にて直接入手 80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛て郵送 水戸芸術館ホームページ[http://www.arttowermito.or.jp/]よりダウンロード

【応募対象】

個人:茨城県内の住民票をお持ちの方

団体:茨城県を中心に活動されている団体

ただし、平成18年度の「茨城の演奏家による演奏会企画」にご出演された方は応募できません。

【受付期間】 2006年5月10日[水]~5月31日[水] 当日必着)

【結果の発表】 2006年10月頃

【開催時期】 平成19年度(2007年4月~2008年3月)

【提出資料】

所定の申し込み用紙 これまでの演奏歴を示す資料(演奏会チラシ等) 住民票の写し 2006年1月1日以降の演奏のデモ・テープ(またはCD、MD、DAT) 返信用封筒1部(80円切手を貼付し、本人の住所・氏名を明記すること)

【お問い合わせ】

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8 水戸芸術館 音楽部門「演奏会企画」係 TEL 029-227-8118 FAX 029-227-8130(担当:矢澤)

チケット・インフォメーション 4月30日(日)発売分

水戸室内管弦楽団第65回定期演奏会
6/8(木)18:30開演、6/9(金)18:30開演、6/10(土)18:30開演
料金(全席指定):S席¥6,500 A席¥5,500 B席¥4,000
ペア券:S席¥12,000 A席¥10,000(各日100組限定、水戸芸術館のみの取り扱い)

水戸室内管弦楽団第65回定期演奏会には、4月27日(木)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

音楽物語 ぞうのババール 5/5(金・祝) ...自由席
アンドレアス・シュタイアー フォルテピアノ・リサイタル
5/12(金) ...中央、左右・裏

4/11(火)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な5月のスケジュール

コンサートホールATM

音楽物語 ぞうのババール~おめでとう、ババール! 生誕75周年記念~
5/5(金・祝)14:00開演
料金(全席自由):大人¥1,500 小人(3歳以上12歳以下)¥1,000
[モーツァルトに贈る音楽の花束-2]
アンドレアス・シュタイアー フォルテピアノ・リサイタル
5/12(金)19:00開演 料金(全席指定):A席¥3,500 B席¥2,500

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
5/14(日)12:00/13:30 5/27(土)13:30/15:00
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ゴールデンウィーク・スペシャル

(親子でお楽しみいただける、1時間のパイプオルガン・コンサート)
5/6(土)13:30開演、5/7(日)13:30開演
オルガン:TRM([T]近藤岳、[R]山口綾規、[M]勝山雅也)
入場無料

ACM劇場

劇団唐組新作水戸公演『紙芝居の絵の町で』
会場:水戸芸術館広場特設紅テント(雨天決行)
5/19(金)19:00開演、5/20(土)19:00開演、5/21(日)19:00開演
料金(全席自由):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥1,500

現代美術センター

「人間の未来へ-ダークサイドからの逃走」
2/25(土)~5/7(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料
水戸市芸術祭 いけばな展
5/26(金)~5/28(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
最終日5/28(日)は9:30~17:00(入場は16:30まで)
入場無料

茨城の主な5月の演奏会

佐川文庫 TEL / 029(309)5020

崎谷明弘 ピアノ・リサイタル
5/20(土)18:00開演

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

吹奏楽フェスティバル
5/6(土)10:00開演
(問)永江楽器 TEL / 029(226)6540

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

第一回やさしギターフェスティバル&シニアギターコンクール
藤元高輝 ギターリサイタル
5/4(木)15:00開演
宮下祥子 ギターリサイタル
5/5(金)15:00開演
藤井敬吾 ギターリサイタル
5/6(土)15:00開演
踊 正太郎・大塚友江 津軽三味線と民謡コンサート
5/21(日)15:00開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

筑波大学管弦楽団第59回定期演奏会
5/20(土)14:00開演
土浦交響楽団第53回定期演奏会
5/21(日)14:30開演
阿見吹奏楽団第25回定期演奏会
5/28(日)14:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2006年5月発行 第116号
編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp]
編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃
馬場千恵 矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...水戸芸モーツァルト3ヶ月連続・
クライマックスへ!